

「抑うつ」を中心とする職場不適応の研究（Ⅱ）

——エゴグラムとロールシャッハ・テストの関係を中心に——

袴 田 俊 一

A Study of Work Maladjustment（Ⅱ）

——Egogram and Rorschach Test in Depression——

Toshikazu Hakamada

Abstract : The purpose of this study was to find characteristic Egogram profile pattern on depressive cases, and investigate the relation between Egogram and Rorschach Test.

Subjects of this study were 22 male office workers who were depressive state because of Stress related Work. I divided their data into "Melancholic" group and "Conflictive" group. The result was as follows.

(1) On real self, "Melancholic" showed high "Adapted Child" score (AC) and low "Free Child" score (FC), On the other hand, "Conflictive" showed low AC and high FC.

(2) On ideal self, both "Melancholic" and "Conflictive" showed "M" Profile pattern.

(3) "Adult" score (A) related to Form response, AC related to Human Movement response, and FC related to Color response.

This result suggests that Egogram is very valuable as not only assessment but also intervention, by using with Rorschach Test.

As the future theme, it is needed to investigate the relation between change of Egogram and that of Rorschach Test.

Key words : 抑うつ Depression 職場関連ストレス Stress related Work 職場不適応 Work Maladjustment 出向 Temporary Transfer エゴグラム Egogram ロールシャッハ・テスト Rorschach Test

I 問題・目的

「抑うつ時代」と言われるようになって久しい。抑うつは気分的な落ち込み——その意味で、誰が陥っても不思議ではない状態——であるが、これが抑うつ症候群になると感情面だけでなく身体面や行動面でも変化が表れ、さらに日常生活にも支障が出始める。日本では1970年代以来、テレンバッハ (Tellenbach, H., 1976) の「状況性抑うつ理論」やクラウス

(Kraus, A., 1977) の「役割理論」などの影響を受けたこともあって、発病状況に強い関心が寄せられてきた。また時代の流れを反映してか、最近では抑うつ状態に陥りやすいパーソナリティ像 (傾向) にも変化が表れてきている。

袴田は、これまで企業の健康相談室から紹介を受けた「抑うつ」のケースに対して、認知療法を中心とする心理的介入を行ってきた。勤労者の場合、特に職場環境の変化が抑うつの誘因になりやすいと言われている。前回の研究

(2003) ではその中でも出向に注目した。2つの企業の男性会社員で1998年から1999年の間に出向を契機として抑うつ状態に陥り、総合病院の神経科外来を受診したケースを対象に、メランコリー群 (Melancholic Type: 以下 M 群と略記、計12名で平均年齢は28.0才) と葛藤、不安群 (Conflictive and anxious Type: 以下 C 群と略記、計10名で平均年齢は27.4才) という2つの抑うつのタイプについてロールシャッハ・テスト決定因との関係を中心に比較・検討を試み、以下の2点を中心に考察した。

(1) ロールシャッハ・テストの決定因において M 群の特徴は濃淡反応と人間運動反応に、C 群の特徴は色彩反応にそれぞれ顕著に認められ、内的活動性や情緒的な統合性は C 群よりも M 群の方が高く、行動化傾向は M 群よりも C 群の方が強い。

(2) 両群とも職場ストレスに関連した抑うつ状態であるという点では同じであるが、対象喪失感をもたらす刺激 (ストレッサー) としての出向 (M 群) に対してコントロール面での障害をもたらす刺激としての出向 (C 群) といったように、M 群と C 群では出向に対する受け止め方が違っている (「もう、二度と前の職場には戻れない…」 (M 群) と「前の職場に戻してくれない限り、安定も取り戻せない!」 (C 群) という言葉に代表されるように、M 群の自罰的な傾向に対して C 群の他罰的な傾向)。

ところで「抑うつ」を対象とする場合、アセスメントの手段としてロールシャッハ・テストだけでなくエゴグラムも施行することが多い。ちなみに、前回のケースに関しては全員に施行していることになる。そこで今回の目的は、2つの抑うつのタイプに特徴的なエゴグラムのプロフィールパターンを見出すとともに、この結果を前回のロールシャッハ・テスト結果と関係づけながら検討することである。

〈方法〉

ロールシャッハ・テストは、施行・記号化ともクロッパ (Klopfer, B., 1962) 法に基づいている。エゴグラムは東大式エゴグラム (TEG) の新版を用い、現実の自己評価に続いて理想についての評価も求めている。また、クライアント自身で考えるための材料として利用できるように、エゴグラムについては結果を全てフィードバックしている。

II 結果・考察

表1は、M 群と C 群のエゴグラムにおける各スコアの平均得点を、現実評価と理想評価別に比較したものである。有意差が認められたのは、現実では「批判的な親」(“Critical Parent” Score: 以下 CP と略記) と「自由な子ども」(“Free Child” Score: 以下 FC と略記、いずれも M 群 < C 群)、「順応した子ども」(“Adapted Child” Score: 以下 AC と略記、M 群 > C 群) の3つのスコアで、理想では CP と「養育的な親」(“Nurturing Parent” Score: 以下 NP と略記、いずれも M 群 < C 群) の2つである (表1)。この結果から、M 群の現実評価では N 型が、C 群の現実評価では M 型がそれぞれ多いことがわかる。

一 現実の評価一

抑うつを対象とする先行研究を振り返ってみると、例えば・CP 得点と AC 得点が高く、FC 得点が低い・AC 得点や CP 得点と SDS (Self-rating Depression Scale) との間に正の相関が認められる、・FC 得点や NP 得点、「成人」(“Adult” Score: 以下 A と略記) 得点と SDS との間には負の相関が認められる、という結果がほぼ一貫して認められている (1995)。しかしプロフィールのパターンについては、W 型や V 型が多いものの、抑うつを決定的に特徴づけるパターンであるとは言い難い (ただし、ここでの被験者には色々なレベルの抑うつが含まれている)。

表1 2群間のエゴグラム得点の比較

	Real：現実					Ideal：理想				
	R CP	R NP	R A	R FC	R AC	I CP	I NP	I A	I FC	I AC
Group M										
Mean	9.2	13.5	14.4	10.4	13.7	13.8	18.2	15.7	17.5	4.4
SD	3.2	2.0	2.4	3.2	3.6	2.2	1.5	1.2	1.4	3.1
Group C										
Mean	14.6	15.5	14.0	14.7	7.7	15.9	19.3	15.5	17.5	5.3
SD	1.4	4.0	2.7	4.0	2.3	1.9	0.8	2.0	2.7	3.0
	**			*	**	*	*			

* p<.05

** p<.01

今回、M群の「子ども」（“Child”：以下Cと略記）については、AC得点が高くFC得点が低いという点で先行研究と同じ結果であるが、「親」（“Parent”：以下Pと略記）の方は、CP得点が高くてNP得点が低いとCP得点が低くてNP得点が高いといった両極端のパターンが多く、どちらのPが高いかによってW型かN型のいずれかとなっている。また、CP得点が低くNP得点が高いN型（=6）の方がCP得点が高くNP得点が低いW型（=4）よりも多い。他にはV型と右下がり（\）型が1ケースずつである。これに対してC群では、ACとFCの関係がM群とは反対のM型（=4）や逆N（I）型（=3）のケースが多い。すなわちAC得点が低くFC得点が高いという点では共通しており、M群と同様どちらのPが高いかで、NP得点が高ければM型、CP得点が高ければI型となっている。他には\型が2ケース、V型が1ケースである。

以上、両群ともそれぞれの群内ではCが同じで、Pの高低によってプロフィールのパターンが異なっている。ちなみにCP得点、NP得点とも高いケースが1、両得点とも低いケースにいたっては0で、該当する質問項目の内容からもCPとNPの両得点とも高いか低いというのは論理的に成立し難い。またA得点は両群とも高く、したがって当然V型も少ない（両

群とも1ケースずつ）。

W型とI型の共通点はCP得点が高いということである。W型はCP得点だけでなくAC得点も高い。したがって、批判や非難の気持ち強いにもかかわらずそれをあからさまには外に出せないの内で内へ向かい、その結果、自責感の強さとなって表れやすいと考えられる。カーンバーグ（Kernberg, O. F.）も抑うつの特徴として、自己と他者の両方に対する過度の批判的態度を指摘している。そして、この態度は超自我からの強い圧力によるものなので、普通なら怒っても不思議でない場面でさえ抑うつ状態に陥ると考えている（1975）。一方、I型はFC得点と同じくらいCP得点が高く、感情を自由に表現し行動も活発であると同時に独善的、批判的でもある。前回のロールシャッハ・テストでも、C群は色彩反応優位で、葛藤処理の特徴として外側の変化を求める傾向が認められていた。この点で、M群の「回りよりも本人が困っている」に対して、「本人よりも回りが困っている」タイプであると言える。

—理想の評価と現実の評価—

理想の評価は両群ともM型が一番多く、M群では6ケースが、C群では4ケースがそれに該当している。次に多いのが山（Λ）型で、両群とも4ケースに見られる。ただし同じΛ型

でも、M 群は全て NP が最高値である（ケース No. 2・3・6・8）のに対して、C 群は全て A が最高値である（ケース No. 5・6・9・12）。また M 群では AC 以外のスコアで理想の方が現実よりも高い得点を示しており、プロフィールのパターンも全ケースとも理想と現実で違っている（資料）。理想は現実がより強調されたパターンか、あるいは逆のパターンかについても、現実が W 型の場合は後者で現実が M 型の場合は前者というように、現実のパターンによって違って当然だろう。

図 1 は、M 群と C 群のエゴグラムにおける

各スコアの平均得点をプロフィールとして示し、理想と現実を比較したものである。両群とも FC と AC の間で理想と現実が交差している。しかし、M 群の場合は FC と AC がそれぞれ逆方向に変化しているのに対して C 群の変化は両スコアとも同じ方向であり、したがって C 群の交差は、その程度の差によって出てきたにすぎないと考えられる。

M 群は現実評価での AC 得点が高い。他者評価（他者からの評価）に対するこだわりの強さという点で過剰適応的であり、その背後には「頭の中だけでの思い込み」（袴田、2002）がう

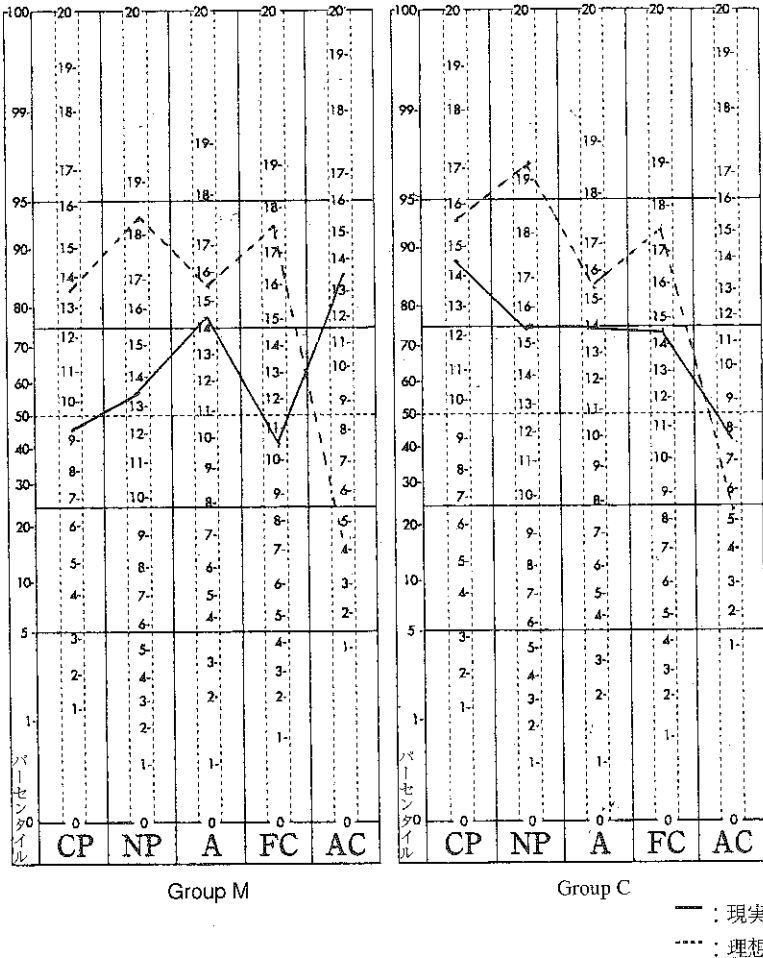


図 1 エゴグラム。理想と現実のプロフィール比較

かがわれる。これはまたメランコリーに特徴的な動きでもある。しかし、たしかに理想と現実のギャップは葛藤であるが、それをどれだけ意識しているかは自己理解の鍵にもなり得る。両者間のギャップは、互いに連続性がある（つながっている）という点からは積極的な動きであるとも考えられるのである。葛藤はパーソナリティとしての「まとまり」（一貫性や統合性）があるからこそ生じるものであり、むしろプラスにとらえたい。また、ここで述べていることはエゴグラムやその結果の受け止め方だけにとどまらず、自己認知や他者認知のレベルまで広げて考えることができるだろう（すなわち、多面的な見方——肯定的な面と否定的な面を含めて、全体としての一人の人間——ができるかどうか）。

ーエゴグラムとロールシャッハ・テストー

エゴグラムの各スコアは、ロールシャッハ・テストのどの決定因と関係しているのだろうか？まず、両群とも A 得点が高い点に関して、前回のロールシャッハ・テストでは両群とも高い F+ % を示していた（M 群は 78.4%、C 群は 80.4% で、有意差は認められず）。形体反応は自分が属する社会的枠組みへの指向性の指標であり、事実を事実と見なした上で行動するという様式を意味している。またフラストレーションなしに外界を認識することは不可能であり、A は現実吟味力と関係していると考えられる。さらに現実と理想の差が最も小さいのも A であり、この点からも感情的なものの影響を受けにくいと言えるだろう。

次に、この A に対立しているのが C の感情的な側面である。FC 得点が AC 得点よりも高ければ感情を表出し、FC 得点が AC 得点よりも低ければ感情を抑制するといった相反する動きが推測され、これは色彩反応と対応している。色彩反応の特徴は受動的、直接的、情緒的ななどの点にあり、感情体験や感情表現、感情面のコントロール（感情的な動きをどう表出する

か、あるいは出さないか）といった様式に関わっている。特に、高い CF（色彩と半確定的形体が結合した反応）は感情コントロールが不十分であることの指標である。

ところで前回、M 群のロールシャッハ・テストにおいて、人間運動反応から高い想像性や創造性を、濃淡反応からは高い感受性をその特徴としてあげた。これは外界に対して素直に反応するのではなく、外界の刺激を一度内部で再構成してから反応する傾向が強いことを意味している。特に濃淡反応に反映される内部刺激に対する鋭敏性は、「ためらい」や「とまどい」といった微妙な心の動きとなって行動を抑制する方向に働きやすい。そして後でも述べるように、過去へのとらわれ（執着）を伴った形での「あきらめ」という、彼らなりの結論に達するのではないかと考えられる。

ーメランコリーにおける理想と現実ー

パーソナリティとは、ある意味で体験の内在化である。M 群はどのような体験を内在化させているのだろうか？また、体験からどのような意味を取り入れ、あるいは同一化し、自分のものとしているのだろうか？

精神分析によると、メランコリーが形成される前提条件として超自我が確立されていなければならない。したがって M 群のエゴグラムには、社会的規範の代表者である父親的な役割（CP）が感情（FC）を押さえるような形で内在化されてきた結果が反映しているとも考えられる。また、これは他者評価と自己評価の連続性という点で空間的同一性に関わることでもあるが、自分にとって重要な他者からの評価は自己評価として受け止められやすい。アリエッティ（Arieti, S.）も「自分自身のためではなく、支配的他者のために生きている。…自己評価を彼らに委ねる。」（1984）と指摘しているように、メランコリーは両親からの要請をあたかも自分自身の成人としての意志や意思であるかのように見なしたり、誤って解釈する傾向が強い。こ

の時、エゴグラムでは A が P から、クラークソン (Clarkson, P., 1992) の混同モデルでいう「汚染 (Contamination)」を受けた状態にあると考えられる。これを「メランコリーは、理想と現実の区別が苦手である。」と〈前者 (A) を現実、後者 (P) を理想に置き換えて〉表現してもよいだろう。

ただし、たとえ理想が現実の肩代わりをしたり、理想を基準に現実を判断していると明らかにわかっている、エゴグラムの結果だけに基づいてそれを伝えるのは難しい。やはり面接で確認することが必要である。この点に関して、春原 (1997) は最初から同時に理想と現実の評価を求めているが、春原の方法だと初めから理想に現実が引きずられて評価されやすい。袴田が先に現実評価を求めているのはこの点を考慮してのことである。しかし、現実と理想は常にセットで動いている部分が強く、両者を完全に区別することはできない。両親に同一視し、彼らからずっと期待され続けてきたものが現在の自分自身の欲求や願望として表明されるのは、メランコリーに限らず一般的にもよくあることである。また、基本的には成人の自我状態にあったとしても、時には、ずっと以前に両親が振る舞っていたように行動したり、考えたり、感じたりする瞬間もあるだろう。

—メランコリーにとっての出向—

「もう、二度と前の職場には戻れない…。」このような気持ちに至るまでの心の動きについて、M 群は内的活動性が高い分だけ、「頭の中だけでの思い込み」となって自己中心的な動きにつながりやすい。また理想を自分自身で作りに上げているところが強い分だけ、それが自己評価における現実と理想のズレとなって現在の自分を肯定的に見ることができず、その結果、強い自己不全感を持ちやすくなると考えられる。以前に紹介したケース (袴田, 2002) でも、仕事面での過度に高い目標レベルは自分で設定したもので、誰に強制されたわけでもなかった。

メランコリーは日常生活に何の変化のない限り破綻をきたさず、社会的にも几帳面な人として高い評価を受ける。それが深刻な危機に見舞われ抑うつ状態に陥るのは、自分の存在を支えてきた秩序が失われた時である。彼らは変化に弱い。これまでの秩序にこだわって、新しい秩序をつくることができない。メランコリーの特徴として、失われた (と思っている) 対象との一体感を求め続けることがあげられるが、これは出向についても同様である。出向後も前の職場に対して一体感を求める。しかし一方では、当然それが無理であるとあきらめている。

しかしここで重要なのは、出向は客観的には決して暗い、つらい出来事ではないということである。転勤や転籍などと違って、出向の本質的な意味は「籍は元のままで、変わらない」ところにある。彼らが所属している企業の慣例からも、出向先で余程のミスを犯さない限り戻ってきた時には昇進が約束されており、本人たちもそれがわかっている筈である。にもかかわらず、彼らは「ずっと順調で思い通りであった過去の自分を取り戻したい！過去に戻りたい！しかしそれはもう無理だろう…」と考える。

M 群のこういった言葉は、再生不可能な喪失であると思い込んでいる点で、メランコリーに特徴的な表現である。悲哀もメランコリーも対象喪失に対する反応である。しかし悲哀と違ってメランコリーの対象喪失は、心の中の出来事であり、必ずしも客観的・現実的なレベルのものではない。M 群の「もう、戻れない…」は、あくまで主観的な現実すぎない。彼らの責任感の強さや他者に対する配慮にしても、その背後にある「頭の中だけでの思い込み」が絶対志向性や役割志向性といった形で表れ、「少しでも足りなければ、駄目！」となるのだろう。「○○○ねばならない！」や「○○○べきである！」、このような気持ちが強く、それを支えるだけの能力やエネルギーが高い分だけ、反動も強いと考えられる。

彼らは出向までは非常に安定しており、葛藤

は見られなかった。したがって、出向を契機に抑うつ状態に陥って初めて、今回論じてきたような心の動きが明らかになったと言えるだろう。また、この M 群の特徴は C 群の不安と対比させることで、よりはっきりする。出向は両群にとってストレスフルな出来事（ライフイベント）である。特に新しい役割を求められるライフイベントはストレスの源であり、それが喪失と評価されると抑うつとなり、脅威（危険）と評価されると不安となる。そして、同じ一つのライフイベントから役割葛藤が生じた時に抑うつ状態に陥るわけであるが、出向までの役割葛藤は M 群よりも、むしろ C 群の方が強かった（袴田、2003）。

クライン（Klein, M.）によれば、抑うつに内在しているのは喪失不安である（1935）。またケンドール（Kendall, P. C.）とイングラム（Ingram, R. E.）は、抑うつの思考が喪失をテーマとしているのに対して不安のテーマは危険であるとし、その上で不安の場合、“What if . . . ?”（「○○○したら、どうなるのだろうか？」）という疑問形を多く用いることを指摘している（1987）。一方 M 群は新しい答えを見つけ対処を試みようとはせずに、「もう、どうにもならない！おしまいだ…」と、あきらめるだけである。岡部（1979）や桜井（1996）らは、メランコリーの特徴について「仮定法過去完了的な思考」という表現で、思考が過去から現在で止まったまま将来と現在が遊離した仮定法の中で生きていることを指摘している。ちなみに、このような思考パターンは SCT（Sentence Completion Test）に表れやすい。今回、全員に施行しているわけではないが、たしかに M 群の SCT には「○○○だったら、○○○だっただろうに…」や「○○○でなければ…」、「○○○さえしなければ…」などの反応が数多く見られる。

Ⅲ まとめ・今後の課題

M 群は「我慢強い人」や「責任感が強い人」といったように、回りから好ましい印象を持た

れやすい。しかし、根本的なところでは自分や自分の理想を基準に物事を判断しており、これは見方によっては自己中心的な動きの反映でもある。下田（1948）の執着性格との関係で言えば、執着性格には役割秩序を自己中心的に組み変えてしまう面があって、いったん起こった感情がなかなか収まらないという点では強迫性に酷似している。また、よく「正義感の強い人」という評価もされるが、「強い正義感ではなく、偏った正義感を持っている」（高野、1995）ために、C 群とは別の意味で回りが困り果てることも多いだろう。このような場合を含め、きっかけが出向であってもその後の経過において、「もう戻れない…」から「早く戻してほしい！」へと訴えが変わるケースに注目することが必要である。

また、理想と現実に関する今回の結果を踏まえた上で、エゴグラムとロールシャッハ・テストの変化に注目することも必要である。エゴグラムでは、状態像の変化（好転）に伴って FC 得点が AC 得点よりも高くなることが推測される。これに対してロールシャッハ・テストでは、状態像の変化によって変化しやすいものと変化しにくいものがあって、一般的に運動反応（特に人間運動反応）は色彩反応ほど変化しない。それならば、同じように変化しやすい C の変化と色彩反応の変化に対応が見られるのだろうか？

さらに、今回は一応検定を行ったが、データ数の関係から詳しくは考察できなかった。今後、統計的処理に耐えるだけのデータを集めなければならないだろう。

交流分析におけるエゴグラムの位置づけについて、もともとエゴグラムは自我状態の構造と機能のアセスメントを目的として、デュセイ（Dusay, J. M., 1977）やハイヤー（Heyer, N. R., 1979）らによって開発された質問紙法である。エゴグラムの長所は、その明確さにある。結果がプロフィールのパターンとして出るので、視

覚的にも理解されやすく、ポジティブな面を見つけやすい。また、これまで両親からのしつけや、発達に伴う空間的広がりの中で学習し繰り返し行ってきた行動のパターンに気づくことで、自己理解から自己実現へとつなげていきやすい。

現在ロールシャッハ・テスト(投影法)を軸に、エゴグラム(質問紙法)を補足的に用いているが、抑うつを対象とする場合、その性質上、介入の過程で修正しなければならないこともある。今後も試行錯誤を重ねながら、アセスメントから介入への橋渡しの手段としてのエゴグラムの可能性について追究していきたい。

文 献

- Beck, A. T. et al.: Cognitive Therapy of Depression. Guilford Publications, Inc. 1979. (坂野雄二監訳「うつ病の認知療法」岩崎学術出版社 1992.)
- Gregory, J. M.: The Rorschach's Factor Structure. — A Contemporary Investigation and Historical Review. *Journal of Personality Assessment*. 59, 1. 117–136. 1992.
- Clarkson, P.: Transactional Analysis Psychotherapy. London, Routledge. 1992.
- 袴田俊一・吉田 功: ロールシャッハ・テストによる身体像境界スコアの研究—コントロールとの関係を中心として *日生病院医学雑誌* 28, 1. 22–26. 2000.
- 袴田俊一: 状態像としての「抑うつ」に関する事例的研究—ある女性ケースの面接過程とロールシャッハ・テスト—*関西福祉科学大学紀要* 5. 101–107. 2002.
- 袴田俊一: 「抑うつ」を中心とする職場不適応の研究—ロールシャッハ・テスト決定因との関係を中心として—*関西福祉科学大学紀要* 6. 153–161. 2003.
- 春原千夏: 学生相談室に来る学生の理想像と現実像—東大式エゴグラムを使って— 森野礼一他編 *心理職・福祉職をめざすひとへ* 168–183. ナカニシヤ出版 1997.
- Kendall, P. C. & Ingram, R. E.: The future for cognitive assessment of Anxiety. New York, Guilford Press. 1987.
- Klopfer, B. & Davidson, H. H.: The Rorschach Technique — An Introductory Manual. New York, Harcourt, Brace & World. 1962. (河合準雄訳「ロールシャッハ・テクニック入門」ダイヤモンド社 1964.)
- Kraus, A.: Sozialverhalten und Psychose Manisch-Depressiver. F. Enke, Stuttgart. 1977. (岡本 進訳「躁うつ病と対人行動」みすず書房 1983.)
- Lerner, P. M.: Psychoanalytic Perspectives on the Rorschach. The Analytic Press, Inc. 1998. (溝口純二・菊池道子監訳「ロールシャッハ法と精神分析的視点 上 臨床基礎編」金剛出版 2002.)
- 岡部祥平: 躁うつ病の心理的要因 水島恵一編: *臨床心理学講座* 第7巻 成人の心理臨床 226–240. 誠信書房 1979.
- Orme, D. R.: Rorschach Erlebnistypus and Problem-Solving Styles in Children. *Journal of Personality Assessment*. 54–2. 412–414. 1990.
- 坂本暢典: 躁うつ病研究の軌跡—精神病理学研究の立場から—*精神科治療学* 6–9. 1043–1050 1991.
- 桜井昭彦: 認知療法と精神分析 大野 裕他編: *認知療法ハンドブック (上巻)* 83–97. 星和書店 1996.
- Schaufeli, W. and Enzmann, D.: The Burnout Companion to Study and Practice. — A Critical Analysis. Taylor & Francis, Inc. 1998.
- 下田光造: 躁うつ病の病前性格について *精神神経学雑誌* 45巻 101–105. 1948.
- Stewart, I. & Joins, V.: TA Today. Nottingham, England & Chapel Hill, NC, Lifespace Publishing. 1987. (深沢道子監訳「TA TODAY—最新・交流分析入門」実務教育出版 1991)
- 鈴木幹夫・広瀬徹也: うつ病と年齢—臨床実践の視点から—*精神科治療学* 17–9. 1093–1103. 2002.
- 高野良英: 精神科障害者とその処遇 *通信医学* 47巻 281–286. 1995.
- 戸川行男他監修: ロールシャッハ・テストI (心理診断法双書) 中山書店 1958.
- 東京大学医学部心療内科編: 新版エゴグラム・パターン—TEG (東大式エゴグラム) 第2版による性格分析—金子書房 1995.
- 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会編: 新版 TEG—解説とエゴグラム・パターン—金子書房 2002.
- Tellenbach, H.: Melancholie. Springer, Berlin. 1976. (木村 敏訳「メランコリー」みすず書房 1978.)

袴田俊一：「抑うつ」を中心とする職場不適応の研究（Ⅱ）

Wells, A. & Matthews, G. : Attention and Emotion : A
Clinical Perspective. Lawrence Erlbaum Associates,

Ltd. 1994. (箱田祐司他監訳「心理臨床の認知心
理学—感情障害の認知モデル」培風館 2002.)

資料 全ケースの年齢とエゴグラム得点

Real : 現実 Ideal : 理想

Group M

No.	Age	R CP	R NP	R A	R FC	R AC	Type	I CP	I NP	I A	I FC	I AC	Type
1	27	11	10	16	11	17	W	15	18	15	15	5	\
2	31	4	12	11	6	14	N	18	20	16	20	0	M
3	23	6	16	13	12	16	N	14	15	17	16	5	H
4	33	11	13	18	12	12	W	13	18	14	18	5	M
5	28	14	15	13	13	12	V	14	17	17	16	7	A
6	29	12	12	17	12	12	W	10	18	18	17	7	A
7	25	9	15	17	2	10	N	15	20	16	18	2	M
8	27	10	16	11	14	14	N	15	20	16	20	2	M
9	25	5	14	13	12	19	N	16	20	16	18	0	A
10	30	10	10	16	11	11	W	12	17	14	18	6	M
11	28	13	15	12	11	7	\	11	17	14	17	3	M
12	30	5	14	16	9	20	N	12	18	15	17	11	A

Group C

No.	Age	R CP	R NP	R A	R FC	R AC	Type	I CP	I NP	I A	I FC	I AC	Type
1	33	13	15	12	13	12	V	16	20	13	19	5	M
2	28	13	18	13	15	9	M	13	18	16	16	4	A
3	26	16	12	16	14	7	H	14	19	15	12	6	A
4	23	14	14	11	10	7	\	19	19	17	16	11	\
5	32	15	20	17	20	8	M	18	20	18	20	3	M
6	26	13	20	14	20	11	M	15	18	14	14	7	A
7	28	16	20	13	19	7	M	18	20	13	20	2	M
8	29	14	13	11	9	5	\	17	20	19	19	10	A
9	24	15	7	13	10	7	H	15	19	14	20	3	M
10	25	17	16	20	17	4	H	14	20	16	19	2	N